

〈資料〉

日本抗生物質学術協議会（現 公益財団法人日本感染症医薬品協会） ファイザー感染症研究助成 海外留学記

井上純人

山形大学医学部内科学第一講座（循環・呼吸・腎臓内科学）

（2018年5月31日受付）

2018年5月に米国胸部疾患学会（ATS）がカリフォルニア州サンディエゴで開催されました。同学会の開催地はサンディエゴであることが多く、自分にとっても同地への訪問は4回目となりました。あまり目新しいものはないものと思っておりましたが、今回は非常に感慨深い会となりました。

本学会に初めて参加したのは、大学院生として研究を始めて約1年経過した頃でした。自分が行っていた研究の成果をまとめ、初めて海外で発表する緊張感がありました。当時私の指導をしてくださっていたN先生は、以前米国留学の経験があり、私が学生ときに留学の思い出を話してくださっていました。自分も漠然といつかは留学をしてみたいという希望を持つようになり、N先生に誘って頂くままに入局をしました。N先生からは厳しく指導も頂きましたが、それ以上に「Academic physicianであるよう」と常日頃仰られ、指導を頂いておりました。

初めて参加したサンディエゴのATSで細菌感染症の講演を聞いたのですが、非常に分かりやすく、かつ非常に興味深い内容でした。当時オハイ

オ州クリーブランドにある、Case Western Reserve Universityでラボを運営していた、Claire M. Doerschuk先生でした。いつか留学するチャンスがあれば、この先生の元でやってみたいと思っていました。

それから大学院の仕事も終わり学位を取得した後は、数年間県内の病院を勤務後大学病院に再び戻ってきて勤務をしておりました。当時は医局から代々留学している先生がいたので、自分の上にいる先輩方がそろそろ帰国を考えている頃、自分にも留学の話を頂くことができました。前任者と同じ所に行くという道もあったようですが、自分としてはやはりDoerschuk先生の所に行ってみようということで、自分で手紙を書き雇って頂くようお願いをしてみました。なかなか返事が来なかったため、諦めきれずにもう一度手紙を出してみたところ、メールが送られてきて「既にこちらから手紙を送っているが届いていないか？」ということでした。Doerschuk先生からの返事が届いていなかったようですが、その後のやり取りで幸いにも採用して頂くこととなりました。それから半年間、ビザの取得、日本の仕事のかたづけ、子

供の学校の手続きなど数々の手続きを経て、2005年5月より渡米しました。それからも住宅の選定や家具、自動車の購入や数々の事務手続きは、言葉の壁、文化の壁に直面しながら乗り越えていくこととなりました。

Doerschuk先生の教室では伝統的に呼吸器細菌感染と好中球の遊走を大きなテーマとしています。私も肺炎球菌や大腸菌を使用し、様々な遺伝子改変マウスに呼吸器感染症を誘発しその炎症反応を検討するという仕事をさせて頂きました。ラボには以前から日本人を多く雇っており、私が渡米した時には既に1名の日本人がおり、その後も日本人が加わって、合計3名の日本人が在籍していました。当然ラボ内の標準言語は英語ですが、日本語でも助けて頂き、当時一緒に働いていた同僚には大変感謝しております。ラボには他に中国、韓国、フィリピン、バングラディッシュなど多国籍の集まりであり、ラボの歓迎会、送別会、クリスマスなど様々なイベントで持ち寄りのパーティーがあったのですが、様々な文化を感じることができました。また生活面では妻と、当時4歳になったばかりの子供を連れていくこととなり、その点は大変不安があったのですが、Doerschuk先生はじめラボのメンバーや、周囲の日本人の方々に助けて頂き、自分が仕事に出ている間にも家族が不安なく米国で生活することができました。なにより安全、かつ不安なく異国で暮らすことができなければ、仕事も続けていくことができなくなってしまいます。

自分が渡米した当時は9.11のテロから既に数年が経っていましたが、やはりその影響が我々外国人が入ってくることに對する厳しさは、以前聞いていた話とだいぶ異なっているという印象を受けました。そして安全に生活するためにそれなりのコストを要すること、石油エネルギーに依存している社会に生きている以上、中東の情勢が変化すれば、それが生活のコストとして影響を及ぼし

てくることを実感していました。留学というのは日本で医師として得ることができる報酬が得られない反面、研究者として得られる報酬はわずかです。更に前述したように安全に暮らすためのコストを惜しむことはできません。これから海外での留学を考える方々には、それだけのコストを覚悟して頂くことは必要なのだと思います。私は留学にあたり、2005年に日本抗生物質学術協議会（現公益財団法人日本感染症医薬品協会）と日本呼吸器学会の留学助成に応募し、幸運にも日本抗生物質学術協議会の助成を頂くことができ、大変感謝しております。

2年間の留學生生活を終え、2007年のATSに参加したその足で帰国し、山形大学に戻ることとなりました。その後約10年間大学で当講座呼吸器チームの診療、研究、教育に携わってきました。その間この留學生生活で得た様々な経験や何より人のつながりによって得る者がたくさんありました。2018年4月より当院病院教授を拝命し、呼吸器チームのトップとして今年のATSに参加することとなりました。同行した大学院生の発表を今度は指導する立場となりました。最終日に日本人の集まりがあり、多くの同じ志を持つ方々とお会いしたのですが、その時に偶然N先生に指導を受けたという若手の先生とお会いしました。N先生は自分が大学院を修了する前に地元に戻っており、病院で指導をされていると伺っていました。指導を受けていたという若い先生も、N先生から「Academic physicianであるよう」と指導を受けていたという話を聞き、初めてサンディエゴに来た時の思いが戻ってきたように感じました。初めて参加したATSから約20年、留学から帰ってきて約10年、これからは自分がAcademic physicianであり、N先生のようにAcademic physicianを育てていくことができればと思いました。

海外留学には自分の目標や夢を実現させるといふ大きな価値がありますが、反面異国で生活する

という多大なリスクを背負うことになります。文化や生活習慣の違いは旅行ではなく生活となった場合大きな問題となります。金銭的な問題も解決していく必要があります。ただ前述した目標や夢の実現と共に、異国で生活し仕事をするということが、そこで得られた多くのつながりは本当に価値のあることです。そうした priceless といわれるような価値のある得難い経験をさせて頂いたと思

います。人員不足の中送りだしてくれた山形大学の方々、当初全く知らない自分を雇い指導して下さいました Doerschuk 先生、米国生活を支えて下さったラボをはじめとした多くの仲間達に感謝します。そしてこの海外留学助成をして下さり、チャンスを与えてくれた本協議会に感謝申し上げます。